

# 学生たちの「学び方」を 決める中高教育



糸川麻里生

私のように英語以外の外国語を大学で教える人間にとって（私の場合はドイツ語）、新入生たちが高校でどのような英語の授業を受けてきたかは、初級語学の授業を計画する際に非常に重視すべき前提となる。

学生たちはたしかに入学試験で一定の点数を取って入学してくるわけだが、入学試験の点数では、学生たちがどのような授業を受けてきたかまでは分からない。私が現在勤務する慶應義塾大学文学部では、入学後に英語のプレイスメント・テストを行なって、習熟度別の英語クラスを編成しているが、このプレイスメント・テストでも、学生たちの現時点での英語力（の一部）が分かるだけだ。

入試で学生を選抜する際には、主としてその時点での学力を基準にするしかないが、いざ入学してもらってからは、「学力」よりも「学習能力」およびその「傾向」を強く意識することになる。まして、現実には初めて学び始めることになる第二外国語の場合は、なおさらだ。「文法」を中心に教えた方が習得してもらいやすいのか、それとも「リスニング」や「オーラル」主体の授業に慣れた学生たちなのか。授業のやり方で、学生たちの語学力にはずいぶん差が出てきてしまう。大きく「失敗」すると、学年度末にはたくさんの学生に落第点をつけなければならなくなる。

初級語学の講座を担当している同僚たちと話していると、大体2～3年の周期で学生たちの「外国語習得」のあり方が変わっている、という意見で一致することが多い。出身地や出身校によっても、もちろんかなりの違いがあるし、理系学部は文法に強く、文科系学部（とりわけ女子の多い学部）はオーラルに強いというような傾向もあるのだが、そのほかに「学年全

体」の傾向というのがあるようだ。文部科学省の学習指導要領が変更されたことももちろん理由のひとつだろうし、そもそも社会が「語学力」に求めるものが変わってきていることも重要な背景だろう。また、教室の雰囲気の影響というものも看過できないようだ。

2007年度の傾向の一つとしては、「丸暗記が苦手」というのがあった。今までは、落第点を取りそうな学生には、試験前に「ここからここまでのページの動詞の変化表を丸暗記してくれば、たぶん落第点にはならないよ」とでも言えば、その部分だけは8割以上のできばえを示してくれたものだ。しかし、今年はたった2ページの表がほとんど覚えられない学生が続出した。

外国語教育法を専門にしている同僚に、このことを相談したところ、「オーラル主体の授業で勉強してきた学生に、“変化表の丸暗記”なんて求めたって、駄目に決まっていますよ。彼らにとっては苦痛なだけで、まったく身につけません」と叱られた。結局、「変化表の暗記」はあきらめ、いくつかの「文」を覚えることを「落第回避策」に切り替えたら、かなりの学生を救うことができた。

もちろん、「落第候補生」ばかりではない。クラスでトップクラスの成績をおさめる学生たちもまた、我々が彼らに合った指導法を早期に見つけられないことには、本来到達できるはずの能力まで達することができなことも多い。

今年も新年度が始まった。もうすぐ出会うことのできる新入生たちとは、どんな勉強をしてゆけばいいのだろうか。学生たちの「学び」のかたちを、中学、高校の先生方と話し合う機会をもっと持ちたいと思う。

（くめかわ まりお・慶應義塾大学教授）